

## 特別寄稿

### 時代精神と人間関係 ～平坦な世界を生きる若者たち～

#### Contemporary Spirit and Human Relationships: Young people who live in the flat world

土井隆義<sup>1)</sup>

Takayoshi Doi

キーワード：高原社会、関係格差、生得的属性、再魔術化、期待値

#### 要旨

社会変動と共に社会意識も変わる。日本社会が成長期から成熟期へと移行するにつれ、若年層では人間関係の流動化が進んだ。その結果、かつての関係不満は関係不安へと変質し、コミュニケーション能力に対する関心が高まっている。揺らぎはじめた人間関係のリスクを逡減させるべく、同質性の高い仲間集団で関係を閉じようとする傾向も加速し、現在ではそれが経済格差と連鎖して関係の格差化と分断を招いている。他方、成熟期を迎えた日本では未来が外部性を失った結果、努力に対する期待水準も低下している。また価値観をめぐる世代間ギャップも縮小している。その結果、青少年の逸脱行動は減少したが、他方で承認の質的劣化が進み、自己の安定感を得ようと生得的属性に拠り所を求めようとする若者が増えている。しかし、関係の格差化と生得的属性の重視が結合すると宿命主義的な人生観が広がり、人生に対する期待水準がさらに低下してしまう。だとすれば、現在の若年層の教育現場で必要なのは、自分を相対化する視線を身に付けるべく人間関係を開いていかせることである。

#### 1. 社会変動と社会意識

##### ●成長社会から成熟社会へ

数年前、「オイコノミア」というNHKの教養番組内で、「人生の成功において最も大切なのは努力か、それとも運やコネか」という調査が試みられていた。その回答はじつに興味深いものだった、20～30代の若年層では「運やコネ」が多かったのに対して、50～60代の壮年層では「努力」が多かったのである。40代では両者が拮抗していた。

加齢効果だけを考えれば、むしろ逆の結果になるのではないだろうか。まだ若者の頃には努力が大切だと素朴に思うこともできようが、世の中を渡っていくうちに現実はそうもいかないことに気

づく。それゆえ、若年層ではチャレンジ精神が旺盛で、壮年層ではむしろ保守化していく、それが従来の傾向だったはずである。しかし、この調査結果は正反対だった。

この調査結果が示唆しているのは、加齢効果を超越するほどの世代効果が存在するという事実である。かつてフランスの映画作家のギー・ドゥポールは、「ひとはその両親よりも時代に似る」と述べた。私たちは、時代を空気を吸って育つ。そのため、生まれた時期によって世代独自の精神構造をもつ。一方では世代間でお互いに相違しながら、他方では世代内で共通するこの独自の精神構造を時代精神と呼んでおきたい。

1) 筑波大学 University of Tsukuba

どうやら現在の日本では、40 代に当たる世代をちょうど境に、その上の世代と下の世代でこの精神構造が大きく異なっているようである。では、その差異をもらしている時代要因とはいったい何だろうか。なぜ 40 代がその境目なのだろうか。どのような社会変動がその前後の落差を生み出しているのだろうか。

私たちの自我形成にとってもっとも重要な時期は、おそらく 10 代半ばの思春期と呼ばれる人生の多感な季節だろう。その観点から過去を振り返ってみると、現在 40 代の人々が思春期を過ごしたのは 1990 年代後半であったことに思い至る。じつはこの頃の日本は、大きな時代の転換点を迎えていたのである。

第二次大戦後から現在に至るまで、日本人の一人当たり GDP の推移を眺めると、1990 年代半ばを境に、大きく 2 つの時期に分けられることに気づく。90 年代以前の日本は山の急斜面をずっと登り続けているようなものだったが、それ以降は平坦な道のりへと移っている。コロナ禍以前はアベノミクスによってしばらく好景気を更新し続けていたが、それでも当時の経済成長率は 1% 前後だった。10% を超えることもあった昭和の時代とは次元がまったく違うのである。

歴史的な変動を身体の生育になぞらえていえば、90 年代以前の日本は成長社会だったといえる。それに対して 90 年代以降の日本は成熟社会に入っている。見田宗介の巧みな比喻を借りるなら、現在の私たちはすでに山を登りつめて、いまや高原地帯を歩みはじめていたのである(2018)。そして、この高原期を迎えたことで、私たちの人間関係には大きな変化が生じている。

私たちは、明確な目標を掲げ、その頂上へ向かってひたすら坂を上っている最中には、一緒に歩んでいる仲間がすぐ隣にいたとしても、その視線はさほど気にならない。みんながそろって眺めているのは山の頂だからである。しかし、その坂を上り切って高原地帯へ足を踏み入れた途端、隣を歩いている仲間の視線が気になりはじめる。これからどこへ向かって歩めばよいのか分からなくな

ると、では隣の人はいったいどこを見ているのか、どこへ進もうとしているのかと、お互いに探り合うようになるからである。

また、かつてみんなで山頂を目指していた時代には、人間関係は固定的であったほうが組織は安定しやすく、目標実現のために効率も良かったといえる。人びとの価値観にも重なり合っている部分が多かったため、人間関係を縛りつける組織や制度の正当性に対して、さほど強い疑いを挟む余地もなかった。ところが、今日のように社会が高原地帯を歩み始めると、今度は流動的な人間関係のほうが様々な状況に対処しやすくなる。同時に、人びとの価値観も多様化し始め、固定化された人間関係を受け入れがたく感じるようになる。こうして旧来の組織や制度の正当性は失われていくことになった。

### ●人間関係の格差化の広がり

日本の社会学者の研究グループである青少年研究会が実施した「都市在住の若者の行動と意識」調査によると、16~19 歳が回答した友だちの数は、2002 年には平均 66 人だったのに対し、2012 年には平均 125 人へと倍増している。ここには「親友」「親友以外の仲の良い友だち」「知り合い程度の友だち」のすべてが含まれており、それぞれの増加率は順に 1.2 倍、1.7 倍、2.0 倍である。もっとも増加が激しいのは「知り合い程度」だから、近年のネットの普及がここに大きく寄与していることは間違いないだろう。

しかし、友人数が増加した理由はそれだけではない。社会が高原期に入ったことで、制度的な枠組みにとられない人間関係が広がったこともそこに影響を与えている。ネットの普及は、そのモチベーションを促進させたにすぎないともいえる。実際、この調査によると、友だちを多くつくるように日々心がけている者ほど友人数も多い傾向にあるが、その傾向は最近の若者のほうに顕著に見受けられる。すなわち両者の相関が強くなっているのである。これは、組織や制度によって友人関係が定まる比率が低下していることを物語ってい

る。社会的な枠組みによって友人関係が縛られなくなった分だけ、個人的な姿勢の比重は増すことになるからである。

こうして高原社会の訪れとともに、私たちの人間関係はかつてほどきつくは組織や制度に縛られなくなり、不本意な関係を強制されることも減った。ところが、このように組織や制度によって関係が規定されにくくなり人間関係の流動性が高まってくると、その分だけ個々人の事情が人間関係に与える影響は相対的に大きくなる。

今日では、人間関係の流動性が増した結果、個人的な好みに応じて自由な関係を築きやすくなった。場面に応じて、自在に切り替えていくことも容易になった。しかしそれは、人間関係がかつてより不安定で揺らぎやすくなったことも意味している。平たく言えば、社交的な振る舞いが得意な人と苦手な人の落差がかつてより大きくなったのである。

実際、日本の社会が高原期に入った後の 10 年間で、若者の友人数には大きなばらつきも生じるようになってきている。先の調査において、友人数の散らばりの程度を数値で比較するため、それぞれの標準偏差を平均値で割った変動係数を求めると、2002 年には 0.78 だったものが 2012 年には 1.54 へと上昇している。制度から自由になって自己責任の比重が増した分だけ、場を盛り上げる能力に長けて対人関係を器用にこなせる若者と、そういった社交術に疎くて関係づくりが苦手な若者との間で、かつて以上に人間関係の格差が生じやすくなっているのである。

また、NHK 放送文化研究所が 1970 年代初頭から継続して行なってきた「日本人の意識」調査には、「充実した生活を送るために大切なもの」を尋ねた設問がある。1973 年と 2008 年の回答を比較すると、大きく 2 つのことが分かる。第一に、どちらの調査時点でも若年層は「付き合い」が大切という人が多く、中年層でいったんそれが減り、高年層で再び増える傾向にある。「経済力」はちょうどその逆のパターンを描いて変化している。これは時代とは関係のない変化であって加齢効果と

いえるだろう。

この調査から分かる第二の事実は、1973 年の若年層では「付き合い」と考える人びとよりも「経済力」と考える人のほうが多く、それが全体の 6 割以上を占めていたのに対して、2008 年の若年層では両者の優劣が反転しているということである。「付き合い」と考える人が全体の 6 割以上を占めるようになるまで増える一方、「経済力」と考える人は逆に減っているのである。高年層について見ると、若年層の変化とはちょうど逆の傾向を示している。両者の動きから判断すると、これは世代による効果と考えられる。

日本の成長期に若者だった人たちは、当時から人間関係より経済力が大切だと考え、高原期の現在もその心性をそれなりにずっと保ちつづけている。他方、現在の若者たちは、経済力より人間関係を重視する傾向にある。しかし、今日の若年層の交友関係を仔細に眺めていくと、関係の流動化がもたらした影響はそれだけに留まらないことに気づく。そこで以降では、このような人間関係の変化が今日の若者たちにどんな影響を与えているのかを見ていくことにしたい。

## 2. 流動化する人間関係

### ● 関係不満から関係不安へ

内閣府が行なっている「世界青年意識」調査で日本のデータを眺めてみると、友人や仲間といるときに充実感を覚えると回答した 18 歳から 24 歳の若者は、1970 年代にはまだ半数程度だった。しかしその後は徐々に増え続け、1990 年代後半からはずっと 70% 台を保っている。人間関係に対する彼らの満足度が上昇してきたのは、日本社会が高原期を迎えたことで、おそらく人間関係の自由度が高まってきたからだろう。そのおかげで、対人関係の不満感が減ってきたのである。

かつての社会を振り返ってみると、同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが人間関係を支える強力な基盤となっていた。換言すれば、当時の人間関係はその

多くが社会的な制度に強く縛られていた。若者たちの世界においても同様で、たとえば同じ学校やクラスの生徒になった以上は仲間でなければならないとか、同じ部活のメンバーである以上は助けあわなければならないとか、そういった規範的な圧力が少なからず存在していた。

しかし、日本社会が高原期を迎えるとともに、私たちは旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない自由で多様な価値観を持つようになる。事実、前節で引用したNHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査によれば、日本人の価値観は徐々に多様化してきている。そして、とくにその傾向が顕著に見受けられるのが若い世代である。

このような価値観の多様化は、人間関係の築かれ方にも大きな変化をもたらしてきた。今日では、たとえば地縁や血縁などの伝統的な共同体も、あるいは学校や職場のような社会的な団体も、かつて有していた強い拘束力を徐々に弱めている。また、友だちのような自発的に作り上げられる関係も、その自由度をさらに高めている。

もちろん現在でも、友だちになる最初のきっかけは、たまたま近所に住んでいたとか、クラスが一緒だったとか、かつてと大して違ってはいない。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっている。同じクラスの生徒だからといって自分と気の合わない相手と無理して付きあう必要などないし、同じ部活の一員だからといって無理をして助けあう必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まっていくなかで、そう考える若者は増えている。

また、近年のネット環境の発達も、その傾向に拍車をかけている。とりわけネットの発達は、若者の人間関係に大きな変化をもたらしている。いまではクラスや部活にとらわれない複層的な人間関係が、学校のなかでも同時に築かれるようになった。たとえば、各自の趣味趣向に応じて気の合う仲間ごとにグループを使い分け、それらの関係を同時並行で進めることも簡単になった。先ほど引用した青少年研究会の「都市在住の若者の行動

と意識」調査でも、遊ぶ内容によって友だちを使い分けていると回答した若者は増えている。

このように今日の若者の間では、人間関係の自由化とネット環境の発達が相まって、既存の制度や組織に縛られない人間関係が広がってきた。不本意な相手との関係に無理して縛られることもないのだから、人間関係の充実度が上昇してくるのも当然の結果といえるだろう。しかし、ものごとの変化には二面性がつきまとうものであり、光があるところにはまた影もある。それは人間関係の自由度の高まりについても同様に当てはまる。

内閣府の「世界青年意識」調査では、友人や仲間との関係について、その充実感とともに悩みや心配ごとの対象となっているかも尋ねている。その結果をみると、充実感を覚える人が増えるにつれて、そこに悩みや心配を感じる者は 1990 年代後半まで減っていた。人間関係への満足度が上昇してきたのだからそれは当然のことだろう。ところが 2000 年代に入るとその傾向が反転することになる。友人や仲間に悩みや心配を感じる人が再び増えはじめるのである。

この調査では「悩みや心配」としか尋ねていないため、その具体的な内容までは分からない。しかし、友人や家族との関係に不満を覚える人が増えたのでないことは確かだろう。充実感はずっと上昇しつづけているからである。では、反転して増えはじめた「悩みや心配」とは何だろうか。それは、おそらく不安ではないだろうか。そう解釈すると、表面上は充実感の上昇と相反する現象のように見えて、じつは相互に矛盾するものではないことが見えてくる。

制度的な枠組みが人間関係をかつてのように強力に拘束しなくなったということは、裏を返せば制度的な枠組みが人間関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ関係が不安定になってきたことを意味している。既存の制度や組織に縛られることなく、付きあう相手を勝手に選べる自由は、自分だけでなく相手も持っている。そのため、その自由度の高まりは自分が相手から選んでもらえないかもしれないリスクの高まりとセットなの



である。

このように、一面では軽やかで楽しい人間関係も、他面では流動的で壊れやすい関係という顔を持っている。お互いに仲良しであることの根拠は、お互いにそう思っている感情の共有にしかないからである。このような状況下では、お互いの親密さをつねに確認しつづけないと、その関係を維持していくことが難しくなってくる。そのため、満足感が上昇しながらも、また同時に不安感も募っていく。関係を保証してくれる安定した基盤がないため、お互いに不安のスパイラルへと陥っていきやすいのである。

### ● コミュニカへの関心の高まり

現代に生きる私たちは、かつてより多くの自由を手に入れ、共同体のしがらみから逃れて一人でも生きていける解放感を味わえるようになった。しかしその代償として、居場所に対する不安感も同時に抱え込んでしまった。そして、この時代の潮流の最先端にいるのが若年層の人たちである。その結果として彼らは、相手の心の内を確かめあう必要性からコミュニケーションに対する関心を高めている。

朝日新聞が「コミュニケーション能力」という言葉が出てくる自社記事の数を調べたことがある。それによると、記事数が急激に増えるのは2004年からである。これは、ちょうど日本の失業率が急激に悪化した時期に当たる。また、経団連の「新卒採用に関するアンケート調査」で、コミュニケーション能力を重視すると答えた企業が急激に増えはじめるのもこの頃である。コミュニケーション能力が不足していると職に就くことすらできない。そんな危機感が若年層の間に募っていったとしても不思議ではないだろう。

しかし、コミュニケーション能力への注目度が高まった理由はそれだけではない。そもそも価値観の多様化した世界では、お互いに相手の価値判断の中身に立ち入ることが難しくなる。そのため、相互に異なった価値観を調整しあうために、かつて以上に高いコミュニケーション能力が要求され

ようになる。従来、日本人は空気を読むのが得意で、「あうんの呼吸」で意思の疎通がはかれるといわれてきた。島国のため、お互いの同質性が高かったからである。

一方、今日のように様々な価値観が錯綜しあうようになった社会では、その具体的な内容を見通すことが困難である。共通の評価基準を持つことはなおさらのこと不可能である。それに加え、いまや人間関係を維持するための基盤として、お互いに社会組織や制度を同じくしていることの比重が下がり、お互いに親密な関係でありたいと願うその気持ちの比重が逆に高まっている。その結果としてお互いの立場を調整しあうために、コミュニケーション能力が重視されるようになってきているのである。

今日、発達障害を抱えている人たちの生きづらさが増している背景にも、このようなコミュニケーション能力至上主義があるといえるだろう。発達障害は、ASD（自閉症スペクトラム障害）、LD（学習障害）、ADHD（注意欠如・多動性障害）と、大きく3つの類型に区分される。いずれも近年になって注目されるようになった特性であるが、その中でも特に時代精神の変容の影響を大きく受けているのがASDである。たとえば、その特徴としてしばしば指摘されるのは、「周囲とのコミュニケーションが苦手である」とか、「こだわりが強く変化が苦手である」とかいったものである。

これらの特徴は、たとえば職人気質という言葉に典型的に示されているように、なんとなく微笑ましいものとして受け入れられていた時代もあった。現在では病理学上の症例とみなされる個人の特性それ自体は、社会的にずっとネガティブなものとして扱われてきたわけではなく、逆にポジティブなものとして評価された時代もあったのである。しかし今日、発達障害にカテゴライズされるような特性を備えた人たちが、日常生活において生きづらさを覚え、そのために障害者として位置づけられやすくなっているのは、これらの特性が現代社会とフィットしなくなったからである。換言すれば、これらの特性を備えた人たちにとって、こ

の社会の仕組みが生きやすいものではなくなってきたからである。

しかし、じつはコミュニケーション能力ほどその評価が他者からの反応に依拠するものはない。コミュニケーションとは、その原理的な性質からして自己の内部で完結するものではなく、つねに他者との関係の総体だからである。コミュニケーション能力とは、じつは相手との関係しだいで高くも低くもなりうるものである。換言すれば、それは個人に内在する能力というよりも、むしろ相手との関係の産物といえる。したがって個人の努力でどうにかなるものでもなく、相手との出会いによって大きく左右されるものである。

現在の若者たちは、この隘路をくぐり抜けるために、本質的なところで自分と似通っていると感じられる相手だけとつながろうとする傾向を強めている。自分と同質的な相手のほうがコミュニケーションをとりやすいと考えるからである。こうして、少しでも安定した人間関係を確保しようと、関係を閉じていく傾向を強めている。

そんなコミュニケーションなど、表面的で薄っぺらいものだと思われるかもしれない。しかし、かつての若者たちが腹を割ってお互いに議論を尽くすことができたのは、基本的なところでは同じ土俵に立っているという前提があったからである。だから最終的にはお互いに理解しあえると思えたのである。しかし今日では、その前提が崩れてしまった。そのため、いくら腹を割って議論を尽くしたとしても、その先に待っているのは最終的にお互いに分かりあえないことの再確認にすぎないと感じられやすくなっている。

もちろん、それもまた議論の成果の一つといえるかもしれない。しかし日常の場面では、そこまですり着くことすら稀である。むしろ多数派からの反対や孤立を恐れて自分の意見を表明しづらくなり、いわゆる沈黙の連鎖に陥ってしまうか、あるいは逆に、自分の意に反してあえて多数派の意見に合わせてふるまうか、どちらかになることのほうが圧倒的に多い。だとしたら、最初からもの見方が同じと思える人たちだけとつながってお

いたほうが、お互いに心理的な負担を感じないで済むと考えられるようになってもお不思議ではないだろう。

### 3. 関係の内閉化と分断

#### ●生得的属性と交友圏の連動

先ほども引用した青少年研究会の「都市在住の若者の行動と意識」調査によると、友だちと知りあったきっかけとして学外での出会いを挙げた10代の若者は、2002年より2012年のほうが少なくなっている。友人と知りあった場所をすべて挙げてもらい、その数の平均値をとってみると、それもこの10年間で低下している。それだけ交友範囲が狭くなっているのである。また、これほどSNSが発達しているにもかかわらず、インターネットで知りあった友だちがいる若者がそんなに増えているわけでもない。2012年でも10%に満たない状態である。

NPO法人「子どもとメディア」の2013年調査によれば、若者年齢が上昇するにつれて、ケータイとスマホの使用時間も増えていく傾向がうかがえる。しかし、そのなかでも13歳と16歳だけは突出して時間数が多い。前者は「中学デビュー」に、後者は「高校デビュー」にあたる年齢である。どちらも学校での人間関係がまだかなり流動的な時期である。そのため、お互いにネット接続機器を駆使して、友だちの獲得競争に励んでいるのだろう。

このように、リアルの世界とネットの世界は決して別のものではない。現実の人間関係とは別の世界がネット上に構築されているのではなく、むしろ現実の人間関係がネット上に拡張されている。ネットの世界で彼らがつながっている相手の圧倒的多数は、学校などでリアルな日常を共にしている仲間なのである。

もちろん、インターネットの普及で多種多様な人間がつながりあうことが容易になったのは事実である。ネットを利用して交友関係を広げている若者もいる。ユーチューブなどの動画投稿サイトで、世界へ向けて自己表現を試みる若者もいる。

しかし他方では、ネットがあるからこそ同質的な仲間どうしで固まり、時間と空間の制約を超えてつながりつづける若者が増えているのも事実である。

基本的に知りあいの間でのコミュニケーション・ツールであるLINEの利用者の圧倒的な多さは、それを端的に物語っている。また、本来は全世界に開かれたツールであるツイッターやインスタグラムなどでも、予想外の危険を回避するために仲間内で鍵をかけて、見知らぬ人とは接触しようとしたくない人たちが多く見受けられる。全世界に開かれたネット空間においてすら、狭いコミュニティ内に閉じこもる傾向が強まっているのである。いわゆる裏アカでも事情は同じである。

人間関係のリスクと不安を減じるのにもっとも手っ取り早く、また現実的な方法は、このように人間関係を閉じて、価値観の似通った者どうしで日々を送ることである。こうして人間関係に少しでも安全パイを求め、できるだけ立場や意見の近い相手を求める傾向が強まっている。自分と似通った価値観の人間だけとつながろうとするようになってきているのである。

しかし、たとえ価値観の似通った者どうしで形成される集団であっても、価値観の多様化した今日では明確な判断基準など存在しない。その点では、依然として関係のリスクは残ったままである。絶えざる不安を呼び起こす構造そのものは解消されていない。このとき、さらに安全に自分の居場所を確保する方法として登場してくるのが生得的属性によるつながりである。それは、価値観よりも不変不動で揺るぎないものと考えられやすく、そのため安定した人間関係を築くための資源として用いられるようになっていく。

博報堂生活総合研究所の「子ども調査」では、2000年代以降、友だちより家族のほうが大切という回答が増えている。また、大切な話をする相手も友だちより親という回答が増えている。さらに、友だちとの時間よりも家族との時間を増やしたいという回答も増えている。いずれも家族の求心力の強まりを示すものである。そして、家族のよう

に生得的なものや友人のように獲得的なものの接点に位置しているのが、生活スタイルや生活レベルを同じくする家族同士の付き合いから派生した幼馴染みの友だちである。

幼馴染みの交友関係は、自らが選択したものというより生得的属性に由来する部分が多い。こうして今日では、生来的な関係に由来する友だちとの関係が幼少期だけで終わることが少なくなり、青年期になってもなお安定した仲間として強い思い入れが続きやすくなっている。そこで求められているのは、いつ踵を返されるかもしれない気ままな友だちからの一時的な承認などではなく、生得的属性をともしにするがゆえにけっして期待を裏切らない友だちからの安定した承認なのである。

このように生得的属性を根拠にして連帯感を得ようとする心性には、流動化が進む現代社会で揺らぎやすくなった人間関係への不安と、それゆえにけっして揺らがない属性に根拠づけられた人間関係への憧憬が潜んでいる。生得的属性は、価値観がいくら変動してもけっして揺るがない安定した基盤と感ぜられる。生得的と感ぜられる属性を同じくする者だけで関係を築き、異なった人びとはお互いに注意深く棲み分けることで、結果的に共存共生の世界が目指されているのである。

### ●経済格差と関係格差の連鎖

昨今では、夫婦間の学歴同質性が高まり、その結果として大卒の家族と非大卒の家族が付きあう機会も減っている。両者の生活圏が分断化されている。そのため、親戚関係、友人関係、地域活動など、家族を起点とした様々な社会関係において、大卒層と非大卒層が交流する機会も減少している。その結果、家族同士の付き合いから派生した幼馴染みの友だちの世界においても、価値観による棲み分けにも増して家庭の生活レベルによる棲み分けが見受けられやすくなっている。

内閣府が2021年に全国の中学2年生から無作為抽出して実施した「子供の生活状況調査」の報告書を見ると、等価世帯収入（世帯人員数の違いを調整するために世帯の年間収入を世帯の人数の



平方根で割ったもの)を3段階に区分したとき、上位の家庭の子どもは、その6割以上が大学以上の進学希望を抱いている。しかし下位の家庭の子どもは、その3割未満しか大学以上の進学希望を抱いていない。逆に、教育を受けるのは高校まででよいと考える子どもは、上位の家庭では1割未満であるのに対し、下位の家庭では3割以上を占める。ここからは、家庭の生活レベルによって子どもの進学意欲に大きな落差のあることがうかがえる。

同調査によれば、下位の家庭の子どもが高校まででよいと考える理由で、もっとも多いのは「自分の成績から考えて」の31.2%であり、次に多いのが「希望する学校や職業があるから」の22.0%である。「家にお金がないと思うから」は15.6%、「早く働く必要があるから」は14.7%にすぎない。家庭の経済状況を気にして進学を断念しようとする者が一定数いるのは事実だが、意欲の占める比重のほうが相対的に大きいことが分かる。ちなみに、上位の家庭の子どもが大学以上を希望する理由としてもっとも多いのは「希望する学校や職業があるから」で、その次に多いのが「親がそう言っているから」である。

このような意欲が積極的に育まれるか否かは、幼少期からの体験の積み重ねによって左右されるところが大きい。しかし、それだけが要因ではない。意欲とはまた人間関係のなかで培われるものでもある。たとえ個人的な体験に恵まれていなかったとしても、友人からの励ましや期待があればそれなりに意欲は喚起されうるだろうし、友人とのたわいもない会話のなかで新たな刺激を受けることもありうるだろう。それが自分の人生を大きく変える契機となることもあるかもしれない。

このように、人間関係もまた私たちの意欲に大きな影響を与えるものである。とりわけ青年期においては、家族より友人から受ける影響がはるかに大きい。生活を同じくする家族とは違って、異なった環境で生育してきた友人は、自分の見知らぬ世界へと窓を開いてくれる存在である。その友人たちと交流するなかで、見知らぬ世界について

一緒に考えてみたり、また新しい刺激に触れてみたりすることで、私たちの意欲は喚起されていくことになる。

しかし、昨今の日本では家庭の経済格差が子どもの関係格差を招きやすくなっている。だとしたら、それもまた意欲格差の背景の一部を成していることになる。実際、上記の調査によれば、進学希望の理由を尋ねた設問で、「まわりの先輩や友達がそうしているから」と回答した者は、大学以上を希望している場合には、等価世帯収入が上位の家庭の子どもほど多く、高校まででよいと考えている場合には、逆に等価世帯収入が下位の家庭の子どもほど多い傾向が見受けられる。この調査結果が物語っているのは、どの階層の子どもたちもお互いに家庭の経済状況が似通った者同士で仲間を作り、その閉じた関係の中で進学希望を考えているという事実である。

問題はそれだけではない。同報告書を見ると、相談できると思う相手として「学校の友達」を選んだ者は、等価世帯収入が多い家庭の子どもほど多く、上位の家庭と下位の家庭には9ポイントの開きがある。「学校外の友達」においても同様で、両者には4ポイントの差がある。逆に、「だれにも相談できない、相談したくない」を選んだ者は、等価世帯収入が少ない家庭の子どもほど多く、上位の家庭と下位の家庭には6ポイントの開きがある。ここからは、家庭の経済状況が子どもの交友関係にも影響を与えている様子がうかがえる。

その理由は容易に想像がつくだろう。たとえば、対抗試合の遠征費やユニフォーム代が大きな負担となる家庭の子どもは、部活動への参加をためらうかもしれない。また、ゲームセンターやテーマパークなどの遊興施設へ出向いて遊ぶには小遣いの足りない子どもは、放課後の遊び仲間に加わることをためらうかもしれない。あるいは友人など作らずに、一人で過ごす道を積極的に選択することもありうる。いちいち誘いを断らねばならない友人を作るより、いっそのこと孤立を選んだほうが自尊感情を傷つけられずに済むからである。

事実、同調査によると、部活動へ参加していな



い子どもは等価世帯収入が少ない家庭の子どもほど多く、上位と下位の家庭では 10 ポイント以上の差がある。また部活に参加していない理由として、「塾や習い事が忙しいから」と回答した者は上位の家庭ほど多く、下位との間に約 16 ポイントの差がある。逆に「費用がかかるから」と回答した者は下位の家庭ほど多く、上位との間に約 14 ポイントの差がある。2023 年度からは部活の地域移行が始まり、活動費の個人負担も増えることが予想されるため、この落差はさらに開いていくことになるだろう。

同様のことは友人関係だけではなく、家庭内の親子関係についてもいえる。たとえば、NPO 法人ピッコラーレが運営する妊娠相談窓口「にんしん SOS 東京」によると、2020 年は意図しない妊娠に関する 10 代女子からの相談件数が激増した。新型コロナの集団感染を避けるために、学校の休校措置が長引いたことがその背景にあるといわれている。

ステイホームのかけ声の下で、自宅に留まっているという選択を心置きなくできたのは、家庭内に自室が用意されていたり、親との関係も良好であったりと、経済的にも心理的にも恵まれた境遇の子どもだけだった。たとえコロナ下であっても、家計を支えるために昼夜を問わず外で働き続けねばならなかった親たちは、家庭内で子どもと接する時間を十分に作ってやることができなかった。その結果、学校にも地域にも家庭にも安全な居場所がないと感じた子どもたちの足がどこへ向かったのかは想像に難くないだろう。

#### 4. 高原社会の時代精神

##### ●努力に対する期待値の低下

日本が高原期に入ったことで大きな変化が見られるのは、以上のような人間関係の面においてだけではない。冒頭で引用したNHKの教養番組「オイノミア」の調査では、20~30 代の若年層と 50~60 代の壮年層で加齢効果とは反対の方向へと人生観が変化していた。また第 1 節で引用したNHK放送文化研究所の調査でも、「充実した生活を

送るために大切なもの」として人間関係を挙げた若者は高原期以降に増加し、お金を挙げた若者は逆に減少していた。他方、高齢層ではそれとはまったく正反対の傾向が見られた。

現在の日本では、高原地帯に入っただけで 20 年が経過し、10 数年といった時間幅の過去はすでに現在と平坦な地続きとなっている。たとえば、アニメ映画『君の名は。』では、2 人の主人公がそれぞれ現在と過去を同時並行で生きており、両者のコミュニケーションが時代を超えてしばしば混信してしまう。ひいては身体も入れ替わってしまう。しかし当初は、2 人の生きている時間がずれていることにお互いとも気がつかなかった。

成長期の社会においては、たとえ 10 年ほどの歳月であっても、その前と後とはまったく異なった次元の世界であるかのように感じられていた。その間に社会の様相は大きく変貌していたからである。しかし高原期の社会においては、自分の周囲を見渡してみたとき、10 年ほどの歳月では社会の光景はほとんど何も変わらない。時間がずれていることにお互いとも気がつかなかったのはそのためだろう。ここから推察されるのは、過去が現在と異なった世界ではなくなったのと同様に、未来もまた現在と異なった世界ではありえなくなっているという事実である。

この事実は、とりわけこれからの人生がまだ長い若年層の人生観に大きな影響を与えることになる。事実、世界価値観調査にて日本のデータを眺めてみると、高原期に入る前と後では若者の努力観に大きな変化が見てとれる。努力しても人生で成功するとは思えないと回答した若年層が、2000 年代以降は急激に増えているのである。努力に対する信頼感が急激に薄れてきているといえる。

最近の新入社員は下積みの仕事に耐えられず、すぐに辞めてしまう。管理職の世代からそういった批判をよく耳にする。しかし、社会が平坦化し、上げ潮が消えた中で、いま我慢していればやがて明るい未来が開けると思いにくいのは当然のことだろう。先行きが見えないのではなく、むしろ先の先まで透けて見えてしまう。それも差して明る

くはない未来が。今日の時間感覚とはこのようなものなのではないだろうか。だとしたら、中途退職の多さも今日の社会状況へうまく適応した結果といえるかもしれない。

このような事情は、まだ社会に出ていない学齢期の若者においても同様である。日本青少年研究所が実施した「高校生の生活意識と留学に関する調査」によると、「現状を変えようとするより、そのまま受け入れたほうが楽に暮らせる」と答えた高校生は、1980 年には約 25% にすぎなかったが、2011 年には約 57% へと倍増している。この変化は若者たちからハングリー精神が衰えたことの帰結と批判的に捉えられることも多いが、現状を変えることのハードルのほうが上がったと捉え直したほうがよいだろう。

たとえて言うなら、動いている列車と止まっている列車では、そのなかで同じ距離だけ前方に歩いても、スタート地点からの移動距離は違ってくる。成長期の日本では社会全体が向上していたため、その上げ潮に乗ることで、わずかな努力でも現状を大きく変えることが可能な場面が多々あったといえる。しかし高原期の日本では、たとえ努力しても現状はなかなかそう大きくは変わらないものへと変質しているのである。

このように、現在の日本では努力の成果を誰もが享受することが難しくなっている。上昇を止めたエレベータのなかで、それでも上昇を実現するためには、他人をかき分けて自分が上へと這い上がらねばならない。それができるのはごく一部の限られた人間だけである。「努力したら報われる」という実感は、今日の社会では希少なものへと変質してしまったのである。

私たちは、「努力したら報われる」と思っていなければ、実際に報われなかったとしても不満感をさほど募らせないだろう。期待と現実の間にギャップが生じないからである。そもそも努力してみようというモチベーションを抱くことすらないかもしれない。まったく同じ社会を生きていながら、高齢者層と若年層で人生観が大きく異なっているのは、おそらくこのような期待水準の差によると

ころが大きいと考えられる。

ところで、「オイコノミア」の調査では、このような人生観の相違はちょうど 40 代の年齢層を境に見受けられた。考えてみれば、それより若い 20～30 代の年齢層は、すでに日本社会が高原化した後に思春期という人生の多感な季節を送ってきた世代である。それに対して 50～60 代の年齢層は、日本社会がひたすら山を登り続けていた時代に思春期を過ごしている。自我が形成される思春期の頃につくられた心性は、時代が大きく動いてもそう変わるものではない。それがこのような世代間の差違をもたらしているのだろう。ちなみに現在 40 代の人たちの思春期は、ちょうど両時代の境目にあたっていたのである。

### ●消えていく世代間ギャップ

NHK 放送文化研究所の「中学生・高校生の生活と意識」調査によれば、中高生の両親が子どもと意見が合わないと感じることは、このところ大幅に少なくなっている。1982 年と 2012 年の調査を比較すると、意見が合わないと感じるが増えた項目は電話の使い方についてだけである。日本で携帯電話が急激に普及したのは 2000 年を越えて以降だから、これは当然のことだといえる。親自身が中高生だった時期とその子が中高生になった時期とでは、社会の通信事情は明らかに大きく違っているからである。

一方、その他多くの項目については、親子間で意見が合わないと感じるものが減っている。第 2 節では、同研究所の「日本人の意識」調査を引いて、日本人の価値観が徐々に多様化していると指摘したが、それを世代別に眺めてみると、世代が新しくなるにつれて価値観の多様化が進んでいると同時に、現在へと近づくにつれて世代間の落差が縮まっていることにも気づく。「親子の断絶」が大きな話題になった頃には、親子の価値観に相当な隔たりがあったが、その後、隔たりは徐々に縮まっていき、現在の親子ではほとんど見られなくなっているのである。

では、世代間のギャップがこのように縮小して

きたのはなぜだろうか。電話の使い方について意見の相違が目立つようになったのは、2000 年代に入って通信事情が大きく変わったからだった。それと同様の理屈で考えるなら、親子それぞれの世代が思春期を迎えた時期の社会状況が通信以外の点では逆に大きく変わらなくなっていることが、世代間のギャップを小さくさせているのだといえるだろう。

1980 年代までの日本社会において「親子の断絶」が大きく叫ばれたのは、その当事は社会が成長しつづけていたため、親子それぞれの世代が思春期を過ぎた頃の社会状況が異なり、それが親子に価値観の相違をもたらしていたからである。かつての親子には、それぞれの世代が思春期を迎えた時期の社会状況に大きな落差があったのである。その間に社会は急激に成長していたからである。しかし今日の親子では、そこにほとんど差が見当たらない。その間に社会はほとんど成長していないからである。

その結果、現在 10~20 代の若者と 30~40 代の親世代とでは価値観が違わなくなっている。すでにどちらの世代も日本社会が高原期に入ってから思春期を送った世代だからである。いわゆる友だち親子が増えてきたのはそのためである。

このような大人と若者の世代間ギャップの縮小は、若者にとって大人という共通の敵が消えてきたことでもある。たとえば、今日の中高生たちの多くは、1980 年代に若者の代弁者と呼ばれ、カリスマのように崇められたロック歌手、尾崎豊の歌を聴いて、被害妄想ではないかと違和感を抱くという。自分の考えを親が理解してくれないとか、自分の希望を教師が受け入れてくれないとか、そういった不満はすでに薄れている。大人はむしろ自分の良き理解者であると感じられるようになっている。

そのため、昨今は青少年犯罪も激減している。そもそも犯罪とは不満の発露である。大人社会に対してかつてのように大きな不満を抱えなくなってきたことが、今日の青少年犯罪を減らしている。対して過去を振り返ってみれば、非行集団のよう

な仲間は大人社会や学校への反発を核に形成されることが多かった。共通の敵がいたからこそ、少年たちは固く団結できたのである。ところが、今日のように社会も学校も敵とはみなされなくなると、仲間集団の結束力は弱くなる。そこで醸成されてきた副次文化も姿を消していくことになる。

世の中が平和になって良かったと思われるだろうか。しかしこのことは、若者どうしの世代内での小さな違いでさえ、今日ではかつてより目立ちやすくなってきたことを物語っている。大人と若者の価値観に大きな落差があった時代には、若者の関心もまずその相違へと向けられていたため、仲間内の細かな違いはさほど目立たなかった。「うちの親はものわかりが悪くて」とか、「あの教師はうるさくて」などと語りあっていたら、それを潤滑油にしてお互いの関係を良好に保つことも容易だった。

ところが現在では、大人たちが共通の敵として子どもたちの眼前に屹立しなくなっている。このような状況は、同世代との関係への鋭敏さをさらに助長し、摩擦を帯びやすいものへと変質させていく。今日、安定した人間関係を構築することが困難になったのは、たんに価値観の多様化によって依って立つ地平が人によって異なるようになり、お互いの考えを理解しあうことが難しくなったからだけではない。また、それによって制度的な枠組みの拘束力が緩み、人間関係の流動化が進んできたからだけでもない。さらに、このようにお互いの小さな差異に対しても、かつて以上に敏感に感じとるようになってきたからである。

今日の若者たちにとって、大人が共通の敵として屹立しなくなったという事実を換言すれば、大人が共通の目標や理想としても屹立しなくなったということである。AKB にいた前田敦子は、第三回の総選挙でトップに選ばれたとき、こう語っていた。「プロデューサーにセンターで歌えと言われても、どうして自分なんだろうと不安があった。でもファンに選んでもらって、ここに居ていいんだと思えました(『朝日新聞』2012 年 1 月 1 日)。」アイドルとしての自分を自己評価するにあたって、



プロデューサーである秋元康による評価だけでは自信を持つことができず、ファンから評価されて初めて安心できたと語っていたのである。

AKBを国民的なアイドルグループへと育て上げた秋元は、そのメンバーにとって神様のような存在のはずである。しかし、その彼から授かった評価であっても、自信の絶対的な根拠にはなりえず、不安を覚えてしまう。彼女はそう吐露していたのである。では、この関係を親と子どもや教員と児童生徒に置き換えてみたらどうだろうか。AKBのメンバーは秋元をしばしば先生と呼んでいたし、その芸能活動も部活に例えられることが多かったので、さほど唐突なことではないだろう。

すると今日の若者にとっては、親や教師から受ける否定的な評価が反発の対象とはなりえなくなっているのと同様に、肯定的な評価もまた自信の根拠となりえなくなっていることに気づかされる。親や教員の発言や言動の重みが大幅に失われているからである。親や先生の教えを信じてさえいれば人生の可能性が開けるなどと、もはや素朴には思えなくなったのである。そこに自分の人生の指針があるとは感じられず、その代わりに、ちょうど前田がファンからの評価を自信の支えとしたように、同世代の仲間からの評価のほうが圧倒的な重さを持つようになっているのである。

## 5. 宿命主義的な人生観

### ●承認の耐えがたい軽薄化

今日の思春期には、かつてのような激しい第二次反抗が見られなくなったといわれることが多い。どんな調査報告書を見ても、親子関係はたしかに良好になっている。そもそも価値観が多様化していることに加え、前節で述べたように親子間で意識の隔たりが見られなくなってきたからである。そして、このような事態が進行している背景には、先述したように社会の高原化という歴史的な要因が横たわっている。

親子が縦の関係から横の関係へと近づいていけば、たしかに風通しもよく居心地のよい親子関係にはなるだろう。博報堂生活総合研究所が小学 4

年から中学 2 年までを対象に行なった調査によれば、家のなかで一番いる場所は居間と答えた子どもは 1997 年には 56%だったが、2012 年には 76%へと増えている。また、家族といるとホッとすると答えた子どもも 35%から 46%へと増えている。これは世代間の現象だから、同じことは学校の教員と児童生徒の関係についても当てはまる。両者の関係もまた良好になっているのである。

しかし、今日の若者の心理的安定という点からいえば、ここには非常に重要な隘路も存在している。その第一は、前節でも示唆したように、世代間の対立が希薄化した結果として世代内の対立が顕在化しやすくなっている点にある。ここには、今日の若者にとって大きな関心事の一つである自己承認をめぐる問題も含まれている。対立が顕在化しやすくなると、友人から得られる承認も不安定なものになってしまうからである。その不安定さを少しでも免れようとして、若年層の人間関係はますます同質的な世界で内閉化していく傾向を強めている。

この承認をめぐる問題は、世代内だけの問題に留まらない。同時に、世代間においても新たな問題を引き起こしている。今日では世代間の関係が良好になったのだから、若者は親や教師から承認を得やすくなったと一般的には思われるかもしれない。しかし、現実にはまったく逆の事態が進んでいる。たしかに表面上は承認を得やすくなったように見えるが、じつはその承認の重さは逆に軽くなっているのである。

私たちは、どんな相手から承認を得たとき、それを貴重なものとして深く重く受け留められるだろうか。それは、自分と対等な相手からの承認ではないはずである。自らの存在など吹き飛ばすような圧倒的な力で迫ってくる相手でなければ、そこから授かる承認は絶対的なものとなりえない。自分の生殺与奪の権利すら握る強力な存在だからこそ、否定されたときの衝撃も大きい代わりに、承認を得たときの安心感も大きくなる。いざとなったら拒否できるような対等な相手からの承認など、その程度の重さと価値しかないものである。



このような観点から眺めてみると、世代間ギャップの縮小は親との関係だけでなく教員との関係においても見られる現象であるから、この承認の軽薄化も親子の関係だけでなく学校の教員と児童生徒の関係にも当てはまることになる。とりわけ 10 代の児童生徒と 20~30 代の教員との間ではそうだろう。今日の児童生徒にとって、教師とはもはや鬱陶しい存在などではなく、むしろ友だち感覚で付き合いあえる相手であるが、それは同時に、教師から与えられる承認が、それだけ重さを失ってきたということでもある。

大人と若者がフラットな関係になっているということは、若者の側からしてみれば、大人に一方的に身を任せ、すべてを頼り切ることができなくなっていることを意味している。同世代との関係がそうであるように、相手の期待に沿い、気に入られるような人間でなければ、自分を認めてもらえないのではないか。そういった不安も募っていきやすくなる。こうして世代間のフラット化が進んできた結果、今日の若者は上の世代に対して強い不満感を抱かなくなってきた代わりに、今度は強い不安感を抱くようになってきている。これが第二の隘路である。

こうして今日の若年層の間では、第 3 節で述べたように友人や仲間に対して不満より不安が募りやすくなっているのに加えて、親や教師に対しても同様に不満より不安が募りやすくなっている。それはどちらの関係においても自由度が高まってきたことの裏返しである。私たちは、強制された従来の人間関係を忌避し、もっと自由な関係を求めつつ今日の社会を築いてきた。その結果、友人や仲間との関係においても、そして親や教師との関係においても、かつてより遙かに自由で軽やかな関係を生きることができるようになった。しかしその見返りとして、いわば不安の二重苦も同時に入手してしまったのである。

第 3 節では、友人や仲間への不安の逡減策として関係の内閉化が進み、しかもそれが生得的属性による分断化をもたらしつつあると指摘した。生得的属性は、価値観がいくら変動してもけっして

揺るがない安定した基盤と感じられるからである。だとすれば、親や教師への不安に対しても同様のメカニズムが見られることになるだろう。もっとも、少なくとも親子関係はそもそもそれ自体が生得的属性の一部である。したがってその関係のフラット化は、親子関係を超えてもっと安定感のある生得的属性へのこだわりとなって表われてくることになる。

生得的属性を根拠にして連帯感を得ようとする心性には、流動化が進む現代社会で揺らぎやすくなった人間関係への不安と、それゆえにけっして揺らがない属性に根拠づけられた人間関係への憧憬が潜んでいた。それでもなお今日の親子関係に見られるように不安を消し去ることができないとしたら、その解消法の対象は関係から存在そのものへと移っていくことになるだろう。いわば親子関係を超越した自己の成り立ちへと関心が向けられ、生得的と感じられる自己の属性そのものに安定的な拠り所を求めようとするになるのである。

### ●再魔術化する若者の世界観

近代化とは世俗化（脱魔術化）が進行する過程でもあった。しかし、昨今の若者に見られるようになってきているのはまったく反対の心性である。今世紀に入ってから信仰を抱く若者が増えているのである。ただし、それは伝統教団に入信する若者が増えたからではない。パラレルワールドや前世や来世、あるいはオーラや奇跡といったものを信じるいわゆるスピリチュアリティへの関心が強まっている。社会の近代化とともに歩んできた現在の伝統教団には、その教義の面でもそれなりに合理化せざるをえない部分があり、脱魔術化の一環に則っている。それに対していま流行しているスピリチュアリティには、むしろ非合理的なものをこそ重視する傾向がある。まさに再魔術化とも呼ぶべき現象が生まれているのである。

こういったものは、成長期の社会を生きていた若者には迷信として蔑まれていたものである。彼らは合理化された人たちだった。それがかつて「信心深いのはお年寄り」といわれていた所以でもあ

る。ところが現在では、その傾向が完全に逆転している。現在の高齢層は、かつて若かりし頃に身につけた合理的精神をいまだに保ちつづけているが、若年層では反対に非合理的精神が復活している。その結果、いまや「信心深いのは若者たち」とでもいうべき状況になっているのである。

パラレルワールドや前世や来世のように、現世と隔絶した世界の出来事に対しては、私たちの力はいっさい及ばない。むしろそこから力を与えられたものがオーラや奇跡といったものである。だからこそ、それは現在の私たちに対して絶対的な規定力をもっているといえる。自分たちの意思では決して変えることのできないものだからこそ、誰も疑えない絶対的な基盤になりうると感じられるのである。先述してきたような絶えざる不安が忍び込む隙間はここに微塵もない。

現在の自分に心の拠り所を与えて安定感を得るためには、かつて圧倒的な権威と権力をもって屹立していた絶対的な他者から授かる自己承認のように、あるいはかつて来るべき理想として掲げられていた輝かしい未来の姿のように、現状を見降ろして規定する超越的な視点が必要である。現在の自分をその自分の視点から規定したのでは不安定きわまりなく、その拠り所は状況次第で容易に覆されてしまいかねない。換言すれば、現在の自分とは異なった次元に根拠が置かれると、拠り所の内実は問われずに済むことにもなる。

ところが、とりわけ現在の日本のように高原期に入って未来が現在と地続きのものにすぎなくなると、未来は超越性を失って私たちが触れることのできる世界になってしまう。それを受けて人間関係もまたフラットなものになってしまう。その結果、私たちは承認の内実を問題とせずにはいられなくなり、未来へと先延ばしにしていた承認の意味が、あるいは他者に委託していた承認の意味が、じつは空白で心許ないものだったという事実と直面することになるのである。

このとき、高原地帯に広がる心性の最先端を生きる若者たちは、未来の時間や絶対的他者に代わって現在の自分を超越してくれる特異地点を改め

て探し出そうと躍起にならざるをえない。その結果、今度はそれを現在を規定する過去の時間やそこを生きていた先人たちに求めるようになっていく。こうして今日では、現在の意味は過去との関係において意味づけられるようになっていく。いくなれば、希求すべき対象がユートピアからノスタルジアへと転換しているのである。

浅野智彦らの研究グループが 2010 年に実施した大学生の意識調査によると、「未来の自分」よりも「過去の自分」に拠り所を求めようとする若者のほうが多いことに驚かされる。彼らは、これから先の自分の姿を思い描きながら現在を生きているのではなく、すでに過ぎ去った自分の姿を振り返りながら現在を生きている。現在の生き方を規定するのは、いまや未来ではなくむしろ過去である。敢えていうなら未来志向ではなく過去志向なのである。

現在のスピリチュアリティもまた自らの前世やオーラといったものを重視する。それこそが自分のルーツであり、絶対的な基盤として現在の人生を規定していると考えられる。ここにもまた自分の努力では変更不可能なものによってこそ人生は決まるという発想が見受けられる。類似したパワースポット巡りなども、自らの霊性という根源的で不変なものを感じさせてくれる場所を求める行為だとすれば、まったく同じ感性にもとづいたものといえるだろう。

こうして見てくると、先述した昨今の再魔術化の傾向は、自らの生の根拠探しをしようとする心性の表われであり、それゆえに自らが背負っている宿命を確認しようとする営みとして位置づけられる。宿命とは、生まれながらにして定められた変更不可能な運命のことである。そこで想定される生得的条件は様々であるが、自分の意思ではどうにもならない要因によって人生が規定されているとみなされている点ではすべて同じである。すなわち、いま再生しつつある魔術とは、自らの運命を変えるための手段ではなく、むしろ自らの宿命を知るための手段なのである。

たしかに信心深い若者は増えているのかもしれ

ないが、それでも世代人口の全体からすればごく一部の現象にすぎないのではないか。そう思われる読者もいるかもしれない。しかし、そんな非科学的なものに疑念を覚える人たちも、じつは科学的な根拠に乏しいとされるポップ脳科学の虜となり、様々な「脳力」の発掘に取り組んでいるのが現状である。本来の脳科学では脳の可塑性についても研究されているが、ポップ化された脳科学では、むしろ潜在的に眠っているはずの力を呼び醒まそうという発想に流れがちである。現在の自分を鍛錬することでさらに力を伸ばしていこうという発想ではない。

脳の機能の多くはまだ十分に解明されておらず、ブラックボックスの領域も大きいため、かえって現在の自分を規定する超越的な存在とみなされやすい状況にある。たとえば、男女の行動や思考の違いのほとんどを脳の性差によって説明しようとするニューロセクシズムなどはその典型だろう。この問題は、OECDが2007年に出した報告書でも取り上げられており、疑似科学による「神経神話」として批判されている。いわば脳が信仰の対象とされ、神話的世界や前世と同じような役割を果たしているのである。神やスピリチュアルが脳に置き代わっただけで、決定論的な世界観であることに何ら違いはない。

したがって、ここには具体的な関心の持ち方は異なっているものの、スピリチュアルな若者たちと共通した心性がうかがえる。すなわち、自由意思で主体的に選択されたものとしてではなく、生まれもった資質に運命づけられたものとして、自分の人生を捉えようとする心性である。現代の魔術も、またポップ化された脳科学も、ともに現在の自分を規定する超越的な存在を確認しようとする営みである。そこで目指されているのは、決定論的な世界の確立によって現在の不安を減じることである。生きる意味を奪い去るものではなく、生きる意味を与え育むもの、それがいまの若者にとっての宿命なのである。

## 6. 時代精神を止揚する

### ●生得的属性と期待値の収縮

今日の新たな宿命主義は、成長期から高原期へと移行しつつある現在の社会状況をそのまま体現した心性の産物である。それは、近代科学の装いを一部にまもってはいるものの、超越的な過去によって規定された決定論的な世界観である。あたかも中世社会のように現在の日常が延々と続いていく世界が高原期の社会だとしたら、進歩主義的な近代規範とは対極の宿命主義的な人間像が再び登場してきても不思議ではないだろう。

日本の社会学者が共同で実施している「社会階層と社会移動全国調査」における1995年のデータと、同じ研究グループの「階層と社会意識全国調査」における2015年データを使って、松谷満が2時点の比較をしてみたところ、「本人の社会的地位は、家庭の豊かさや親の社会的地位で決まっている」と考える若年層は、前者では約31%だったのに対して、後者では約46%へと大幅に増えている(2019)。近年の経済格差の拡大とその固定化は、たしかに彼らの意識に影を落としている。しかし、このような決定論的な思考が広がっている背景にあるのはそれだけではない。

自分の人生をどのくらい自由に動かせると思うかを尋ねた世界価値観調査の設問から日本のデータを眺めてみると、前世紀末まではそう思う傾向が強まっていたが、今世紀に入ってから逆転していることが分かる。社会の流動性が落ち、組織や制度によって人生が再びきつく縛られるようになっていたのであれば、この変化の理由もよく分かる。しかし現実にはむしろ反対で、世界規模でのグローバル化の進展とともに、日本社会の流動性もますます高まっている。にもかかわらず自由になる感覚が失われているのだとしたら、この変化の背景には生得的属性に根差した宿命主義的な人生観が潜んでいるといえるのではないだろうか。

西田芳正によれば、現在の貧困家庭で成育した若者たちは、自らの境遇に対して違和感や反発を覚えることなく、むしろそれをごく自然なことのように受け入れる傾向を強めているという(2010)。



そこでは、勉強が分からない、学校でうまくいかない、暮らしが貧しいといった不満の様相はほとんど見られず、彼らの親と同じく不安定で困難の多い生活をさほど強く自覚することもなく自らの元へ引き寄せてしまっている。第 3 節で指摘したように、大卒の人びとと非大卒の人びとが日常生活の中で交流する場面も減り、両者の生活圏が分断化されているからである。そのため、現在の境遇だけが自分に馴染みのある見慣れた生活となっているのである。

もちろん彼らといえども、努力することの価値は十分に認めている。むしろ素直すぎるほど素直に受け入れ、肯定している。しかし、だからといって努力すれば自分の未来も拓けると思っているかといえば、けっしてそんなことはない。そんな未来がありうるなどは露にも思っていない。なぜなら、その努力に耐えられるだけの資質や能力は自分には備わっていない、それが自分の生得的属性だと思い込んでいるからである。自分はあらかじめそんな能力をもって生まれてきてなどないと決めてかかっているのである。そんな能力があると実感しうるような機会にこれまでほとんど恵まれてこなかったからである。そのため、一般的な価値としての努力主義の効用を認め、それを自分に適用しようとするほど、現実の期待水準はますます下がってってしまう。

個人の努力では乗り越えられない大きな壁が、この社会には立ちはだかっている。そんな現実を身をもって体感している人たちが、学校でお題目のように唱えられる努力主義だけを内面化すると、このように自らの人生に対する期待を逆に収縮させることになる。努力主義を内面化することは、同時に自己責任主義を内面化することでもあるため、これだけ努力しても自分がいまだに劣悪な境遇に置かれているのは、まだまだ努力が足りない自身の至らなさゆえだと感じさせることになる。そして、それを乗り越えるだけの努力を發揮できず、成果を出せないでいるのは、そもそも自分にはその資質が欠けているからだと思い込んでいく。生得的属性こそが自分の人生を規定する最大の要

因であると日頃から考えているからである。

さらに、ここに学歴による生活圏の分断化が重なると、学歴差にともなう社会的格差もまた生得的属性に由来するものと考えようになり、ますます格差の固定化を受け入れていくことになる。それは、自分自身の生まれつきの資質に由来するものだから仕方ない。そう考えて期待水準がさらに下降していつてしまうのである。こうして宿命主義的な人生観の浸透は、格差の固定化の元凶を社会に求めようとする批判的な精神を封殺していくことになる。

考えてみれば、このような宿命主義的な人生観は、近代以前の伝統社会において一般的に見受けられるものだった。しかし、今日のそれが前近代的なそれと根本的に異なっているのは、理不尽な身分制度によって抑圧され、やむなく希望を諦めているわけではないという点にある。もっとも、前近代的な身分制度を理不尽だと考えるのは、そもそも私たちが近代人だからである。その時代を生きただけの人びとにとってはそれこそが自明の現実であって、たとえば農民も努力次第で武士になれるなどは夢にも思わなかったはずである。そして、現在の時代精神の陥穽もここにある。

今日、生まれもっていると考えられている素質や才能の多くも、じつは与えられた社会環境のなかで、かつての身分制度と同じくらい格差をともらないながら、再生産されてきたものである。たとえば、いくら天才的なピアニストであろうと、そもそも日常的にピアノに触れさせてくれ、定期的にレッスンに通わせてくれるような恵まれた成育環境になれば、その才能に目覚めることは難しかったはずである。その点から見れば、それらの素質や才能もけっして生得的属性とはいきれない。

もちろん、生まれ落ちた環境は自分で選んだものでないため、個人にとっての宿命であり、生得的属性であるかのように感じられやすいだろう。しかしその環境も、社会制度の設計いかんでいかようにも変えていけるものである。そう考えれば、社会的に見るとそれも宿命などではない。このよ



うに見てくると、今日の宿命主義的な人生観も、じつは前近代的なそれと本質的には違ってないといえる。社会的に作られた素質にもとづく境遇の違いを、あたかも生来的なものと思っただけなのである。

私たちの自己認識は、自分の置かれている環境をどのように判断するかによって異なってくる。ここで人間関係が内閉化し、視野が狭くなっていると、その環境を客観的に見つめることが難しくなる。その結果、たとえ劣悪な環境におかれていたとしても、その状況に対して疑念を抱きにくくなる。それは、疎外された状況に置かれているという認識それ自体からも疎外されていくことを意味する。いわば二重化された社会的排除が進んでいくことになるのである。

### ●自分を相対化する視線を

宿命主義的な人生観の下では、社会的に排除されていることを当事者に意識させないような排除が、したがって剥奪感さえ抱かせないような排除が、人知れず進行していく。反発や絶望を覚えることもなく、「それが自分の宿命なのだ」と、納得をもって淡々と迎え入れていってしまうことになる。

その陥穽を防ぐために必要となるのは、現在の自分を相対化する視点である。外部の視点から自分を見つめ直すことである。かつて未来とはその外部に位置するものの一つだった。絶対的な他者からの評価もその一つだった。その視点からいまの自分を見つめることで自己を相対化する視点を育んでいた。ところが未来が現在の延長にすぎなくなると、そして、他者との関係もフラットになると、その外部性が消え去ってしまう。このとき、自分とは異なった人とその意見に触れることは、現在の自分を相対化するためにせめて残された営為の一つだともいえる。

そもそも私たち人間の文化とは、安定して確実な結果を求めることよりも、できるだけその結果の充足を先送りし、むしろ過程そのものを楽しもうとする姿勢から生まれたものである。食欲や性

欲を想起してみれば、それはすぐに分かる。人との出会いもそれと同じだろう。安定した関係のみを重視していると、余計な対話は生まれてこない。たしかに対話は結論に至らないことも多い。しかし、相手の発言から影響を受け、自分自身が変容することは多々ある。それが自分の知らない自分、新しい自分の発見へとつながっていく。寄り道や脇道に迷い込んだほうが人生は楽しい。

私たちは、自分の顔を自身でじかに見るができない。鏡に映して初めて確認することができる。それと同様に、自分がどんな人間なのか、自分が一番よく知っているようであり、じつは案外と分かっていないものである。むしろ自分の思い込みに縛られることのない客観的な自己像は、他者から受ける評価という鏡を通して、はじめて認識できることが多い。自分では思いもしなかった評価を周囲から受けたことで、自分でも気づいていなかった自分と知り合うことができた人は、世の中にけっこういるのではないだろうか。だとすれば、それこそが新しい自分の可能性に気づく契機ともなりうるはずである。

しかし現在は、その機会をもつことが難しくなっている。人間関係の同質化が進むなかで、思ってもみなかった意外な反応を友人から受ける機会が減り、未知の世界へチャレンジしてみようという意欲をかき立てられにくくなっている。しかも、若者が一様にそのような事態に陥っているわけではなく、そこには明確な格差が生じている。経済的に恵まれた層の若者は、それでも意思さえあれば関係を広げていきやすい環境に置かれているが、経済的に厳しい層の若者は、たとえ関係を広げていこうにも困難な状況に置かれている。こうして経済格差が関係格差と連鎖し、その関係格差が意欲格差を深めている。

宿命主義的な人生観の広がり背後にある今日の社会の高原化は、いわば必然的な歴史の一段階でもある。そのため、私たち個々人の営みでその趨勢に抗うことは難しい。しかし、その人生観が同時に人間関係の産物でもあるのなら、その関係のあり方を変えることで、すなわち内閉化し分断

化してしまった関係を再び統合し開いていくことで、その人生観を多少なりとも変えることは可能ではある。だとすれば、彼らがその心性をさらに伸ばしていきやすいような環境を整えることは、私たち大人に託された使命だといえる。

自分の思い込みから自身を解放し、新しい自分を見つけ、意欲を育むためには、新たな出会いこそが重要な契機となりうる。もっとも、そのことに気づけるのは、多様な他者との出会いを通じてのみである。そのため、自助努力だけにその出会いを任せておいたのでは、この格差を克服することはなかなか困難である。ところが私たち大人は、これまでじつは正反対の営みをしてきたのではないだろうか。少子化も進行するなかで若者の一人一人に目が届きやすくなり、その安全を確保しようとするあまり、彼らの生活圏を囲い込みすぎてきたのではないだろうか。

いま必要なのは、むしろ逆に彼らの眼差しを外側へ向けさせるための手助けをすることである。現在の若者たちはせつかく平坦な高原を歩んでいるのだから、その環境を活かして彼らの未来への見通しを明るいものへと変えていくことが大切である。近年、社会制度を設計するにあたってフューチャーデザインという手法が注目を集めている。未来の世界に住んでいる自分をイメージし、その視点から時間を遡って現在の社会制度のあり方を検討するという手法である。いまそれが可能なのは、高原期の社会を生きている人にとっての20年後や30年後は、自分の姿を想像することが容易な世界だからである。遠くまで見通しがきく時代だからこそ、この手法が効果的に使えるのである。

未来を想像しやすい状況にあるということには、たしかに既述したように承認の内実を浮き彫りにしやすく、不安を煽り立てやすいという作用もあるだろう。しかし、だからこそ持続可能な社会制度を設計していく上での強みになるともいえる。そのためには顔を上げ、遠方を見つめつつ歩いていかなければならない。高原の景色といえどもずっと同じわけではない。絶えず歩みつづけていけばやがて景色も変わっていく。高原地帯だからと

いて、未来が現在とまったく変わらないわけではない。そして、その景色が変わったことに気づくには、顔を上げて歩いていなければならない。

## 文献

- 土井隆義 2014『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える—』岩波書店
- 土井隆義 2019『「宿命」を生きる若者たち—格差と幸福をつなぐもの—』岩波書店
- 土井隆義 2023a「現代の若者はなぜ「診断」を求めるのか?—抛り所としての「出自」をめぐって—」『思春期学』41(1)
- 土井隆義 2023b「若年層の格差をめぐる連鎖の構図—経済格差/教育格差/体験格差/意欲格差/関係格差—」『個人金融』18(1)
- 土井隆義 2023c「時代精神としてのコスパ志向—未来が外部性を喪失した時代—」『表現者クライテリオン』109
- 松谷満 2019「若者はなぜ自民党を支持するのか」吉川徹・狭間諒多朗編『分断社会と若者の今』大阪大学出版会
- 見田宗介 2018『現代社会はどこに向かうか』岩波新書
- 西田芳正 2010「貧困・生活不安定層における子どもから大人への移行過程とその変容」『犯罪社会学研究』35